聖霊降臨節第 18 主日礼拝説教要旨(9 月 20 日)

『朝ごとに新しく』早川 真牧師

哀歌 3:22-33

哀歌は、イスラエルの民が捕囚によってバビロンの地に移された後、その地に残った者が深い悲しみの中で書いたものだと考えられています。

22 節に出てくる「慈しみ」という言葉は、契約に基づく神の愛を意味する言葉です。結婚式では時が良くても悪くても、愛するということを誓いますが、神様のイスラエルの民に対する愛はまさにそのような愛でした。そして「憐れみ」という言葉は、子宮、またはらわたという意味を語源に持つ言葉です。それは母がお腹を痛めて産んだ子に対する憐れみの思い、その子の苦しみを見る時にはらわたが痛むような思いを表しています。

イスラエルの民は、目に見える偶像や力の強い国々に依り頼みました。そして預言者を通して何度も何度も語られたにもかかわらず、その道を歩むことをやめませんでした。その結果、神はイスラエルの民にバビロン捕囚という苦しみを与えられました。しかしそれは神がイスラエルの民を捨てられたのではなく、この苦難を通して本当により頼むべきお方を示すためでした。

神は時に私たちに徹底的な懲らしめを与えられることがあります。その中に置かれる時、私たちはなぜ一刻も早くこの苦しみを取り去って下さらないのだろうか、と叫ぶ者であります。しかし神の御心は、人の子らを苦しめ悩ますことではなく、その苦しみ、悩みの先にある本当の希望へと私たちを導くことです。

神様は私たちが復活の朝を迎えるのを待っておられます。自分ではなく神に希望があるということ、そのことに気付かされること、それが復活の朝です。たとえ光が全くない時でさえも、神の愛は朝ごとに新しく注がれています。その神の愛の中で人生の朝を迎えることのできる幸いを共に主に感謝したいと思います。